

# I : 総括研究報告

総括研究報告書

## 薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と 近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究

研究代表者：嶋根卓也（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部）

---

【研究要旨】本研究班では、わが国の薬物乱用・依存に関する最新状況およびその経年的変化を異なる対象集団に対する全国規模の疫学調査を通じて情報を収集するとともに、大麻や一般用医薬品の乱用といった近年、公衆衛生上の問題が拡大しつつある個別の課題について掘り下げることを目的とする。

研究計画に基づき、今年度は、以下の分担研究課題を実施した。

研究1：薬物使用に関する全国住民調査（2023年）

この調査は、一般住民における飲酒・喫煙・医薬品・違法薬物の使用実態を把握するとともに、その経年変化を調べることを目的とする。本研究は、わが国で唯一、定期的に実施されている薬物使用に関する全国調査である。対象は、層化二段無作為抽出法（調査地点：250）によって無作為に選ばれた15歳から64歳までの一般住民5,000名である。

※なお、次の研究課題は令和6年度のみの実施とする。

研究2：飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2024年）

研究3：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査（2024年）

研究4：救急医療における薬物関連中毒症例に関する実態調査：一般用医薬品を中心に

研究5：米国における嗜好用大麻の合法化が在米日本人の意識・行動に与える影響に関する研究

研究6：豪州における大麻規制の現状と青少年に対する予防教育に関する研究

【主たる結果】研究1により、次の知見が得られた。

薬物使用に関する全国住民調査（2023年）を実施し、計3,114名から調査票を回収した（回収率62.3%）。重複回答や除外基準に合致する対象者を除いた計3,026名を有効回答とした（有効回答率60.5%）。対象者の平均年齢は43.5歳、男性49.3%、女性50.7%であった。主な結果は次の通りであった。

- 1) アルコール：過去1年経験率は76.6%、過去30日経験率は60.7%、過去30日ビンジ飲酒率は34.2%であった。過去30日ビンジ飲酒経験率は、2021年調査から有意に増加した。
  - 2) タバコ：過去1年経験率は22.5%、過去30日経験率は20.5%であった。経年的に緩やかに減少傾向にある。
  - 3) 解熱鎮痛薬：過去1年経験率は70.5%、過去30日経験率は41.5%であった。過去30日使用率は、2019年（31.7%）から2023年（41.5%）にかけて有意に増加していた。習慣的使用
-

---

率は、2015年（2.3%）から2023年（3.8%）にかけ有意に増加していた。

- 4) 精神安定薬：過去1年経験率は6.1%、過去30日経験率は4.4%、習慣的使用率は3.6%であった。経年的に増加傾向にあるものの、有意差は認められなかった。
- 5) 睡眠薬：過去1年経験率は7.5%、過去30日経験率は4.7%、習慣的使用率は3.1%であった。経年的に増加傾向にあるものの、有意差は認められなかった。
- 6) 医薬品の乱用経験：過去1年以内の乱用経験率（者数）は、解熱鎮痛薬0.84%（約74万人）、精神安定薬0.47%（約41万人）、睡眠薬0.27%（約23万人）と推計された。
- 7) 市販薬の乱用経験：過去1年以内の乱用経験率（者数）は、0.75%（約65万人）と推計され、男性0.70%、女性0.80%、10代1.46%、20代0.59%、30代0.69%、40代0.20%、50代1.24%、60代0.51%であった。乱用に用いた市販薬の入手先は、薬局・ドラッグストア等の実店舗36.0%、家の常備薬16.0%、インターネット4.0%、入手先不明56.0%であった（複数回答可）。
- 8) 違法薬物：各薬物の生涯経験率（者数）は、大麻1.5%（約134万人）、有機溶剤1.2%（約104万人）、覚醒剤0.5%（約47万人）、MDMA0.5%（約44万人）、コカイン0.4%（約37万人）、危険ドラッグ0.3%（約29万人）、LSD0.3%（約22万人）であった。ヘロインは統計誤差範囲内であった。有機溶剤使用者の減少と大麻使用者の増加が確認された。
- 9) 使用した大麻の形状は、乾燥大麻88.4%、大麻樹脂7.0%、大麻ワックス・リキッド4.7%、形状不明9.3%であった（複数回答可）。
- 10) 違法薬物：各薬物の過去1年経験率（者数）は、大麻0.23%（約20万人）、覚醒剤0.12%（約11万人）であり、他の違法薬物は統計誤差範囲内あるいは該当者がいなかった。

【結論】今回の調査は、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行後の初めての調査となった。回収率は60%台までに回復した。違法薬物については、有機溶剤は有意に減少、大麻は有意に増加していた。過去1年以内に大麻を使った経験のある国民は約20万人、覚醒剤は約11万人と推計された。他の違法薬物は統計誤差範囲内であった。今回の調査では一般住民における市販薬の乱用経験を初めて調べた。市販薬の乱用経験率は0.75%であり、過去1年以内に市販薬の乱用経験のある国民は約65万人と推計された。

---

## 全国レベルでの薬物乱用・依存の実態把握

- 研究1 薬物使用に関する全国住民調査(嶋根卓也)
- 研究2 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査(嶋根卓也)
- 研究3 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査(松本俊彦)

## 薬物乱用・依存に関連する近年の重要課題

- 研究4 救急医療における薬物関連中毒症例に関する実態調査:一般用医薬品を中心に(上條吉人)
- 研究5 米国における嗜好用大麻の合法化が在米日本人の意識・行動に与える影響に関する研究(Tooru Nemoto)
- 研究6 豪州における大麻規制の現状と青少年に対する予防教育に関する研究(富山健一)

### 期待される主な知見

- 一般住民における違法薬物および医薬品乱用の動向(生涯経験率、過去1年経験率の推計値)と乱用者の特徴
- 中学生における違法薬物および医薬品乱用の動向(生涯経験率、過去1年経験率の推計値)と乱用者の特徴
- 物質使用障害患者の動向(主たる薬物)と患者の特徴

### 期待される主な知見

- 急性中毒の対象となる一般用医薬品の製品名(GC/MS、LC/MS/MSIによる分析)、中毒症例の詳細
- 米国における嗜好目的での大麻使用の合法化が在米日本人に与える影響
- 豪州における大麻の規制状況や青少年に対する予防教育プログラムの詳細

### 薬物乱用・依存の各種対策の基礎資料として活用

第五次薬物乱用防止五か年戦略に関連する基礎資料として活用(目標1,2)  
UNODCなどの国際機関での活用(生涯経験率、過去1年経験率など)

#### 研究分担者

嶋根卓也 (国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部)  
松本俊彦 (国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部)  
上條吉人 (埼玉医科大学医学部臨床中毒学)  
Tooru Nemoto (Public Health Institute, U.S.)  
富山健一 (国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部)

#### A. 研究目的

薬物乱用の予防および薬物依存症者の支援を推進する上で、薬物乱用・依存に関する実態を正確に、かつ継続的に把握することが求められる。第六次薬物乱用防止五か年戦略(2023年8月薬物乱用対策推進会議)においては、施策の一つとして薬物乱用実態の研究の推進が明記されている。具体的な取組として、薬物乱用・依存の疫学的研究、薬物乱用・依存に関する意識・実態調査、薬物依存症・中毒者に対する支援の在り方に関する研究等を推進するとされ

ている。

本研究班では、わが国の薬物乱用・依存に関する最新状況およびその経年的変化を異なる対象集団に対する全国規模の疫学調査を通じて情報を収集するとともに、大麻や一般用医薬品の乱用といった近年、公衆衛生上の問題が拡大しつつある個別の課題について掘り下げることを目的とする。

具体的には、研究1「薬物使用に関する全国住民調査」により、全国の一般住民における違法薬物および医薬品乱用(市販薬、睡眠薬、精神安定薬)の経験率(生涯・過去1年)および経験者数の推定値を算出する。研究2「飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査」により、全国の中学生における飲酒・喫煙・薬物乱用の経験率(生涯・過去1年)および経験者数の推定値を算出する。研究3「全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査」により全国の精神科医療現場における乱用薬物の動向、ならびに薬物関連精神疾患患者の臨床的特徴を明らかにする。研究1は1995年より、研究2は1996年より、研究3は1987年より継続しているモニタリング調査

でもある。これまでの研究 1、2 によって、一般住民および青少年において大麻使用者が増加していることに加え、研究 3 によって鎮咳去痰薬などの市販薬を主たる薬物とする依存症例が急増していることを報告した。

個別の課題については、研究 4「救急医療における薬物関連中毒症例に関する実態調査：一般用医薬品を中心に」により、救急医療施設に搬送される一般用医薬品の過量服用患者の実態調査：背景、症状、臨床経過、予後を調べるとともに、カフェインやジフェンヒドラミン、デキストロメトルファンなどの乱用対象となっている有効成分について、定性・定量分析などの機器分析を施行し調査する。研究 5「米国における嗜好用大麻の合法化が在米日本人の意識・行動に与える影響に関する研究」により、米国における嗜好用大麻の合法化が、在米日本人の米国滞在中および帰国後に想定される大麻使用行動に与える影響を質的・量的に検証する。研究 6「豪州における大麻規制の現状と青少年に対する予防教育に関する研究」により、わが国と同じく WHO の西太平洋地区に位置する豪州における大麻の規制状況および青少年に対する薬物乱用防止教育に関する情報を収集・整理する。研究費配分の都合上、各研究は単年度での実施となる。

研究計画に基づき、今年度は、以下の分担研究課題を実施した。

## 研究 1

### 薬物使用に関する全国住民調査（2023 年）

研究分担者 嶋根 卓也

国立精神・神経医療研究センター  
精神保健研究所薬物依存研究部

#### A. 研究目的

本研究では、一般住民における飲酒・喫煙・医薬品・違法薬物の使用実態を把握するとともに、その経年変化を調べることを目的とする。本研究は、わが国で唯一、経年的に実施されている薬物使用に関する全国調査である。本研究

は、1995 年より隔年で実施され、今回で 15 回目の全国調査となった。得られた知見は、薬物乱用・依存に関する各種対策の立案・評価を講じる上での基礎資料として供する。

#### B. 研究方法

対象は、層化二段無作為抽出法（調査地点：250）によって無作為に選ばれた 15 歳から 64 歳までの一般住民 5,000 名であり、調査期間は 2023 年 10 月 16 日から 12 月 22 日までであった。対象者へのアクセスを考慮し、今回の調査より、アンケート一式を各対象者の住所地に事前郵送する方法に変更した。また、アンケート回答への利便性を考慮し、アンケート用紙の回収方法を①訪問回収（従来の方法）、②郵送返送、③インターネット回答から選べるようにした。一定期間の後、調査への参加・不参加の意向が確認できなかった対象者については、事前にトレーニングを受けた調査員が訪問し、調査の説明および協力依頼を行った。また、近年の薬物乱用・依存の動向を踏まえ、市販薬（咳止め薬など）の乱用経験（過去 1 年経験）、乱用に用いた市販薬の入手経路、市販薬乱用の健康影響に関する知識についての調査項目などを追加した。調査実施にあたり、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た（承認番号 A2023-031）。

#### C、D. 研究結果・考察

計 3,114 名から調査票を回収した（回収率 62.3%）。重複回答や除外基準に合致する対象者を除いた計 3,026 名を有効回答とした（有効回答率 60.5%）。対象者の平均年齢は 43.5 歳、男性 49.3%、女性 50.7%であった。主な結果は次の通りであった。

- 1) アルコール：過去 1 年経験率は 76.6%、過去 30 日経験率は 60.7%、過去 30 日ビンジ飲酒率は 34.2%であった。過去 30 日ビンジ飲酒経験率は、2021 年調査から有意に増加した。
- 2) タバコ：過去 1 年経験率は 22.5%、過去 30 日経験率は 20.5%であった。経年的に緩やかに減少傾向にある。

- 3) 解熱鎮痛薬：過去1年経験率は70.5%、過去30日経験率は41.5%であった。過去30日使用率は、2019年(31.7%)から2023年(41.5%)にかけて有意に増加していた。習慣的使用率は、2015年(2.3%)から2023年(3.8%)にかけ有意に増加していた。
- 4) 精神安定薬：過去1年経験率は6.1%、過去30日経験率は4.4%、習慣的使用率は3.6%であった。経年的に増加傾向にあるものの、有意差は認められなかった。
- 5) 睡眠薬：過去1年経験率は7.5%、過去30日経験率は4.7%、習慣的使用率は3.1%であった。経年的に増加傾向にあるものの、有意差は認められなかった。
- 6) 医薬品の乱用経験：過去1年以内の乱用経験率(者数)は、解熱鎮痛薬0.84%(約74万人)、精神安定薬0.47%(約41万人)、睡眠薬0.27%(約23万人)と推計された。
- 7) 市販薬の乱用経験：過去1年以内の乱用経験率(者数)は、0.75%(約65万人)と推計され、男性0.82%、女性0.80%、10代1.46%、20代0.59%、30代0.69%、40代0.20%、50代1.24%、60代0.51%であった。乱用に用いた市販薬の入手先は、薬局・ドラッグストア等の実店舗36.0%、家の常備薬16.0%、インターネット4.0%、入手先不明56.0%であった(複数回答可)。
- 8) 違法薬物：各薬物の生涯経験率(者数)は、大麻1.5%(約134万人)、有機溶剤1.2%(約104万人)、覚醒剤0.5%(約47万人)、MDMA0.5%(約44万人)、コカイン0.4%(約37人)、危険ドラッグ0.3%(約29万人)、LSD0.3%(約22万人)であった。ヘロインは統計誤差範囲内であった。有機溶剤使用者の減少と大麻使用者の増加が確認された。
- 9) 使用した大麻の形状は、乾燥大麻88.4%、大麻樹脂7.0%、大麻ワックス・リキッド4.7%、形状不明9.3%であった(複数回答可)。
- 10) 違法薬物：各薬物の過去1年経験率(者数)は、大麻0.23%(約20万人)、覚醒剤0.12%

(約11万人)であり、他の違法薬物は統計誤差範囲内あるいは該当者がいなかった。

## E. 結論

今回の調査は、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行後の初めての調査となった。回収率は60%台までに回復した。

違法薬物については、有機溶剤は有意に減少、大麻は有意に増加していた。過去1年以内に大麻を使った経験のある国民は約20万人、覚醒剤は約11万人と推計された。他の違法薬物は統計誤差範囲内であった。

今回の調査では一般住民における市販薬の乱用経験を初めて調べた。過去1年以内の市販薬の乱用経験率は0.75%であり、乱用経験のある国民は約65万人と推計された。

## F. 研究発表

### 1. 論文発表

- 1) Kobayashi M, Otomo M, Takeshita Y, Matsumoto T: Sex differences in the characteristics of stimulant offenders with a history of substance use disorder treatment. *Neuropsychopharmacology Reports*, DOI: 10.1002/npr2.12357, 2023.
- 2) Mizuno S, Shimane T, Inoura S, Matsumoto T: Situational Factors Affecting Abstinence from Drugs: Panel Data Analysis of Patients with Drug Use Disorders in Residential Drug Use Treatment. *Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports*, 2024. <https://doi.org/10.1002/pcn5.174>
- 3) 高橋哲, 鈴木愛弓, 近藤あゆみ, 服部真人, 小林美智子, 喜多村真紀, 嶋根卓也：覚醒剤事犯受刑者における自殺念慮の生涯体験率とその関連要因の検討. 自殺予防と危機介入, 第44巻1号, 1-8, 2024.
- 4) 喜多村真紀, 嶋根卓也, 高橋哲, 小林美智子, 大伴真理恵, 鈴木愛弓, 松本俊彦：薬物使用のトリガーとしての月経前症状を持つ女性の特徴—覚醒剤使用のメリット・

- デメリットに焦点を当てて. 女性心身医学, 28(3), 2024.
- 5) 嶋根卓也: 依存症治療における薬剤師の役割: 医療品の乱用・依存を例として. 日本アルコール関連学会雑誌, 24(2): 15-19, 2023.
  - 6) 嶋根卓也: 大麻を使う若者たちとのコミュニケーション—有効な、有効ではない予防教育—. 刑政 134(7): 38-49, 2023.
  - 7) 嶋根卓也: 薬物問題の現状と課題—疫学と国の対策—. II アディクション各論—1. 物質使用症, 精神科治療学第 38 巻増刊号: 78-83, 2023.
  - 8) 嶋根卓也: 子どもたちの市販薬乱用の現状と対応. 特集・子どもたちの生命を守るために—自死予防を中心に—. 教育と医学 71(6): 73-79, 2023.
  - 9) 嶋根卓也: 1 章 物質使用症群 物質使用症の疫学 薬物使用. 物質使用症又は嗜癖行動症群 性別不合 (講座 精神疾患の臨床) (樋口進 編), 中山書店, 東京, pp24-40
  - 10) 嶋根卓也: Topics 大麻合法化とその影響. 物質使用症又は嗜癖行動症群 性別不合 (講座 精神疾患の臨床) (樋口進 編), 中山書店, 東京, pp161-169, 2023.
  - 11) 嶋根卓也: II-4 「助けて」という気持ちをクスリと一緒に飲み込んでしまう(「助けて」が言えない 子ども編) (松本俊彦 編), 日本評論社, 東京, pp166-177, 2023.
  - 12) 嶋根卓也: 日本における薬物依存の現状. 第 10 章 10.1 薬物依存, アルコール・薬物・ギャンブル・ゲームの依存ケアサポート (樋口進 監修), 講談社, 東京, pp122-135, 2023.
- ## 2. 学会発表
- 1) Shimane T, Inoura S, Kitamura M, Matsumoto T: Abuse of Over-The-Counter Medications and COVID-19 related stress among high school students: from a nationwide cross-sectional survey in Japan. International drug forum 2023, Bangkok, Thailand, 2023. 8. 7-9.
  - 2) Shimane T, Inoura S, Kitamura M, Matsumoto T: Abuse of Over-The-Counter Medications and COVID-19 related stress among high school students: from a nationwide cross-sectional survey in Japan. Thailand Addiction Scientific Conference 2023, Chiang Mai, Thailand, 2023. 8. 9-11.
  - 3) Nakashima M, Kodama N, Mori H, Shimane T: Development of juvenile cannabis relapse prevention program (F-CAN) focusing on communication skills with familiar people. 10th World Congress of Cognitive and Behavior Therapies. Soul, 2023.6.1.
  - 4) 嶋根卓也, 高橋 哲, 近藤 あゆみ, 大伴 真理恵, 小林 美智子, 秋田 悠希, 竹下 賀子, 松本 俊彦: 覚醒剤事犯者の理解とサポート: 法務省法務総合研究所との共同研究. シンポジウム 21「依存症調査研究事業の成果紹介」第 119 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2023.6.22.
  - 5) 嶋根卓也, 猪浦智史, 喜多村真紀, 松本俊彦: 「助けて」が言えない子どもたち-市販薬の乱用を例として-. シンポジウム 3「薬物過量摂取」第 50 回日本小児臨床薬理学会学術集会, 大阪, 2023.10.1.
  - 6) 新海浩之, 嶋根卓也: 薬物依存回復施設につながる人の断薬状況の変化に関するカテゴリカル時系列分析. 日本犯罪心理学会第 61 回大会, オンライン, 2023.9.23-24.
  - 7) 嶋根卓也, 猪浦智史, 喜多村真紀, 松本俊彦: 高校生における市販薬乱用の有病率の推計: 薬物使用と生活に関する全国高校生調査 2021 より. 2023 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2023.10.14.
  - 8) 水野聡美, 嶋根卓也, 猪浦智史, 松本俊彦: 薬物依存者の断酒継続が断薬継続に及ぼす影響: 薬物依存回復施設利用者のパネル

- データを用いた研究. 2023 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2023.10.14.
- 9) 新海浩之, 嶋根卓也, 松本俊彦: 依存症回復施設につながる人の断薬・断酒状況の変化に関するカテゴリカル時系列分析: 縦断調査からの知見. 2023 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2023.10.14.
- 10) 喜多村真紀, 嶋根卓也: 大学生における物質使用関連問題に対する援助要請意図について—学内援助機関に焦点を当てて—. 2023 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2023.10.14.
- 11) 沖田恭治, 喜多村真紀, 岡野宏, 齊藤友美, 嶋根卓也, 松本俊彦: 物質使用障害を取り巻くスティグマを惹起・持続させる言語表現に関する質的研究. 2023 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2023.10.15.
- 12) 喜多村真紀, 嶋根卓也, 高橋哲, 小林美智子, 大伴真理恵, 鈴木愛弓, 松本俊彦: 薬物関連問題に対する影響因としての月経前症状と ACE—全国の刑務所における「薬物事犯者に関する研究」より—. 2023 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2023.10.15.
- 13) 助友裕子, 市瀬雄一, 細川佳能, 大浦麻絵, 嶋根卓也, 杉崎弘周, 中川明日香, 東尚弘: 高等学校 2 年生のがんリスク認知の関連要因—がん対策推進に資するがん教育事業評価のための全国調査データの解析—. 一般社団法人日本学校保健学会第 69 回学術大会, 東京, 2023.11.12.
- 14) 喜多村真紀, 沖田恭治, 岡野宏, 嶋根卓也, 松本俊彦: 「ダメ。ゼッタイ。」という表現が違法薬物の使用経験を有する者に与える印象について. 第 45 回全国大学メンタルヘルス学会総会, 北海道, 2023.12.21-22.